

## 絵日記で見る中国の思い出

～ 20 年前のこんな中国が好きだった～

今春、コンサルタンツ北海道“私のプロジェクト X”に寄稿するようにと佐藤厚子広報部からミッションがきた。断ることを知らない私は、そく「分かりました」と軽い返事をしてしまった。まあ、何か話題はあるだろうと。私の人生ももうすぐ 70 年、いろいろやってきました。思い出の多い仕事、仲間と苦労して仕上げた仕事、人との出会い、そして未知の世界との遭遇など……、本当に楽しいことが多くあった。そこで思いついたのが未知との遭遇、20 数年前の中国の珍道中絵日記を披露しようと考えた。たかだか 10 日間であったが初めての中国との遭遇、ヨーロッパとは違い衝撃ともいえる程の興奮を幾つも覚えた。時に、私は山崎豊子著の「大地の子」を読み、満州の大地の中に残された日本人戦災孤児を中国人が育ててくれたというこの本を読み、中国に対する私の印象は全く変わっていた。そんな時、瀋陽市との国際技術交流から親善訪問の機会を与えられ、視察団 4 名の訪問となった。帰国後、どうしても絵に残したいという気持ちが強くなり、一コマ一コマ酒を飲みながら思い出し、絵日記風に描いたものである。どうぞ皆さん「22 年前にタイムスリップ」して楽しんでいただきたい。

### □ 中国大陸へ

1994 年(平成 4 年)9 月、今から 22 年前の出来事である。

当時、日中国交回復(1972 年)を記念して全国の自治体が中国との都市交流を開始していた。

札幌市では 1982 年遼寧省瀋陽市との姉妹都市提携が締結されていた。締結 10 年が経ち文化交流から技術交流へと進展し、この関係で私は中国訪問の機会を与えられた。技術交流の視察団は 4 名で 3 名は全員上司、団員は建設局でも大酒のみが選抜された。

瀋陽市から来中の際はぜひ中国で初めての「瀋大高速道路」を見せたいという事から、空路で大連に入り、ここから瀋陽までを陸路によって瀋陽入りとなった。全長 375km、約 6 時間の中国流ドライブを経験した。瀋陽視察後は、北京・香港を視察し帰国した。中国 10 日間の旅であった。



大連～瀋陽まで高速道路

92年9月15日、成田のホテルで前祝が過ぎて全員二日酔いでの出陣となった。私以外は、初めての海外への旅、希望と不安を胸に秘めて我々は、大連行の最新ジャンボのビジネス席に搭乗した。これから「恐ろしい旅の始まり」であることを、誰も知らずに。

団長曰く「ひどい空港だな、大丈夫か」。この嘆きが最後まで続くのであった。

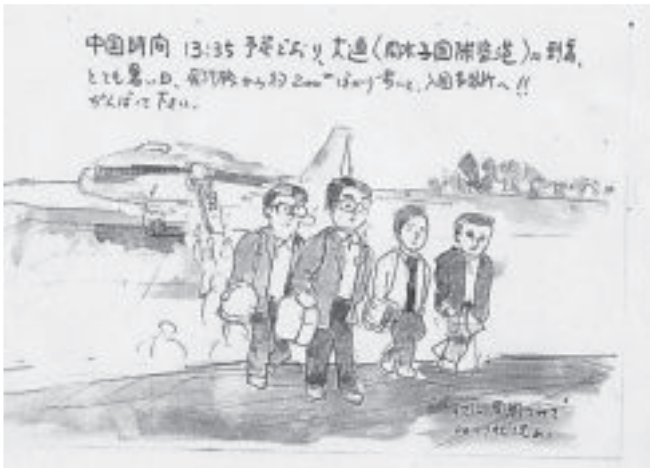
空港には、前年札幌市に來られた瀋陽市の方々が出向かえてくれた。「こんにちは、ニーハオ」と団長が笑顔で挨拶を交わした。ここで通訳が訳すことになるのだが、横にいるのは真っ青な顔をした李オバさんが立っていた。「こん・に・ち・わ・、ゲエ・」としどろもどろ。今にも吐きそうな雰囲気。聞くと、車酔いで立っているのが精いっぱい。挨拶も簡単にして車に乗って瀋陽に向かった。午後3時過ぎ、通訳なしの6時間のドライブとなった。通訳はダウン、機能不全。



いざ中国へ出陣



車酔いでグロッキーの通訳



大連周水子国際空港に到着

成田から約2時間半で大連空港に着いた。飛行機の窓から見たターミナルはどこかの古ぼけた倉庫の様であった。スチュアーデスの「気を付けて」の声を背に、我々は安倍首相の親善訪問の様にタラップで中国の大地(滑走路)に降りた。しかし、出迎えはなく倉庫・ターミナルまで自力で歩くのであった。

当初、瀋陽から出迎えの車は「アウディ」と言われた。しかし、実際に來たのは中古の「トヨタライトエース」、プライドが傷つく。さらに、タイヤは丸坊主でゴムを張り付けた再生もの、団長曰く「何よ、これ!、大丈夫か」。この車で瀋陽へのドライブが始まった。高速を数時間走って感じるのは、この道路にはカーブらしきものがないほど単調な構造、ハンドルが無くても重心の移動で走れるほど。車窓か

ら、レンガ造りの農家の塊が見える。当然、一戸建てではない。貧しそうな佇まいの家である。しばらく農地が延々と続く、しかし農機械を見ることはなかった。中国は、本当に大きい国だ。



沿道のレンガ造りの農家の家

この当時、中国人にとっては高速道路のルールは全く知らない。車の普及率は数%の時代である。突然、自転車が走っていたり、人が渡っていたり、農作物を干していたり、脇で果物、野菜が売られていた。

この絵は、故障したバスと乗客である。携帯電話もない、誰を待っているのだろうか。何とも不思議な光景であった。



故障したバスと乗客

確かに、沿道の人達にとっては何のメリットもない道路なのだろう。何か、日本にはないホッとする光景であった。

大連を出て2時間ぐらい、最初のトイレタイムとなった。まだ日本の高速道路を経験していない瀋陽の随行者が自慢げに「ドライブイン(中国では)」へ案内した。



トイレでビックリポン

何とそこには、自動車の基本部品が売っていた。排気マフラー、ライト、……驚いた。故障車のためのおようだ。そして、トイレへ入った。事前に聞いてはいたが、まさか近代的な高速道路のトイレが……。団長曰く「おい、ひどいぞ、大丈夫か!」。本人が、環境に慣れず危ないのであった。とにかく、未知への世界と考えればよいのである。しかし、出そうなものも出なくなる。これを見てから、大きい方はホテル以外ではしないこととした。

午後6時過ぎ、夕闇が迫り、日が沈みかけている。日本であればライトを既に点けている。ついに日が沈んだ、周りは真っ暗、しかし、運転手はスモールだけでライトは点灯しない。まるで自慢げの様に。たまにすれ違う反対車線の車もそうであった。





夕闇を突っ走る・無灯火で

電気を節約しているのか、目が極端に発達しているのか。路面には、故障車、停車のトラック、ごみ、車の部品が転がっている、上手によけて走っている。団長曰く「おい、大丈夫か、ライト点けさせろ！」。これが2時間続くのであった。

当りはすでに真っ暗、スピードメーターは140kmを指している。タイヤはペラペラ。まだ、ライトを点灯しない。我々の目では、既に前方を視認できない。運ちゃんは、我々の気持ちを感じず、たばこを吹かしながら余裕で運転している。我々4人は、冷や汗で、手すりを力の限り握りしめて、ひたすら目を見開いて前方を見ていた。やがて、ドライバーも観念したのかライトをつけた。視察団ホットし、一斉に気が抜けて、お休みの世界に入ってしまった。もうすぐ瀋陽に着く。

□ 瀋陽に入って

午後9時過ぎ6時間をかけて無事着いた。ホテルは「金城大酒店」であった。決して大酒飲みが泊まるホテルではない。この国では一般的な名前なのである。早速、ホテルで歓迎会をしていただいた。ここは国際ホテルでなく、人民軍の経営するホテル、一般的に外国人は宿泊しないホテルであり、その分



恐怖におののく視察団

中国の文化・習慣を満喫させていただいた。

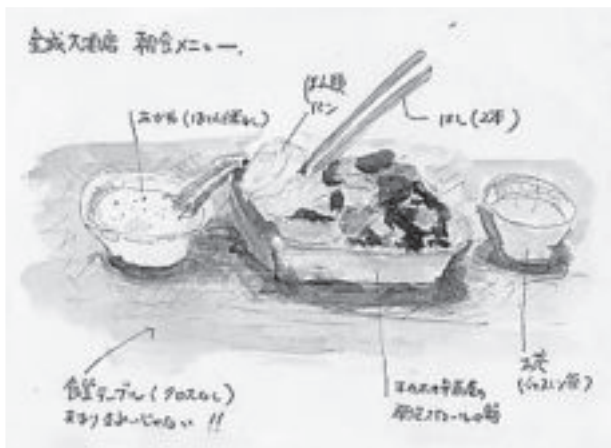
生き返った通訳の李オバさんから、部屋の案内をされた。他の団員には部屋の鍵が渡されたが、最後の私には、「高宮さんの部屋には鍵ありません」、「なに！ない！」「どうして？」と聞くと、「無くなったのです」。驚くのが中国、もう驚かない。このため、私は外出・帰るたびに美人のガールを呼ぶ毎日であった。これを見た団長、「お前だけおかしいぞ、大丈夫か」



私の部屋には鍵がない



ホテルでの朝食風景



純中国風の朝食

勉強し日本への渡航は経験なし。このためカタカナ語が分からない。我々が如何に適当なカタカナ語を使っているかを認識した。我々は彼女のおかげですっかり明るさを取り戻した。帰国後、カタカナ辞典を彼女に送った。

朝、薄暗い4時ごろから「ゴーゴワー」と凄い音が聞こえる。何事かと見ると、蟻のようにウゴメイ

朝、あまり食欲もなくレストランに降りた。日本のホテルとは違う光景であった。薄暗く、凄い匂いと混雑、バイキングなので並んでみた。女性から発砲スチールの皿と箸を受け取り、「取れ！」という感じで進んだ。並んでいる食材とテーブルの汚さに食が全く進まない。テーブルは、食い散らかしたような感じ。これが中国の文化であった。

午前、通訳が変更する旨が連絡された。しかし、ここでは大きな期待はしない。すべて外れるからである。しかし、会ってみると良い方に外れた。

王(ワン)さん、美人、26才既婚、日本語は中国で



通訳の交代



ているのが見えた。眼下にあったのは「自由市場(広場)に集まっている人民」であった。とにかく凄い人数であった。まるで「蟻の巣のよう」であり、中国の元気の良さを感じた。



ホテル前の自由市場

この当時、中国で新しいものを発見することは難しい。とにかく古い、汚い、掃除しないことが目についた。この絵は、自由市場に荷物を満載して集まってくるバスである。法律など全く無視して最大限機能的にバスを使っている。見てると何とも懐かしく「まあ、いいか」と何故か許せる光景であった。

瀋陽市内で突如異次元的なハイカラな女性と出くわす。前髪を“はね上げる”タイプが流行りのようでした。懐かしく思います。



ハイカラな女性

□ 瀋陽から北京に

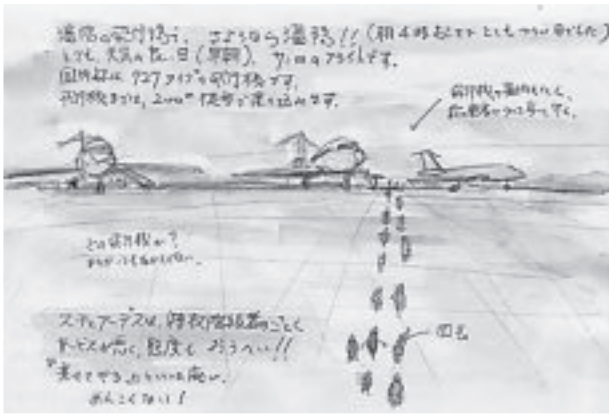
瀋陽での4日間の殺人的な強行軍、中国側のおもてなしは凄かった。中国人の肝臓と胃袋は桁が違う。日本人は殺されてしまう。そんなことを言いつつも我々は毎晩瀋陽を楽しんだ。瀋陽の方々には本当にお世話になった。一生懸命、中国を見てもらおうとしていた。当時は、今のような経済発展の前であり、本当の中国の街並み・文化を知る・見ることができたと思っている。

瀋陽では、行く先々でお土産や大袈裟というほどの記念品をいただいた。最終的に全員のお土産をひと部屋に集めると約1立方メートル近くになった。当然、持帰りは不可能、殆どを船便にした。しかし荷物は1年後、ボロボロになって札幌に届いた。

瀋陽から北京に向かう日。来た時と同じ、北京行の飛行機727まで約200mほど歩いて機内に搭乗した。どの飛行機に乗るのか案内がない。自立してないと生きていけない。

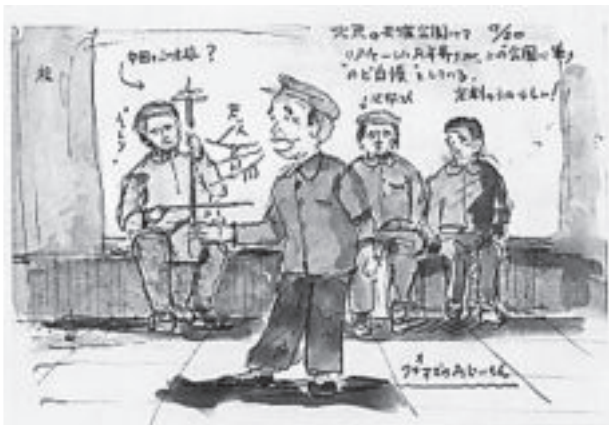


自由市場に集まるバス



瀋陽空港から北京へ

天壇公園を見学していると歌が聞こえてきた。人が集まっている所に行くと、お年寄り達が集まり、「のど自慢」をしていた。多分中国の民謡でも、脇には伴奏となる二胡を奏でていた。着ている服は皆さ



天壇公園で“のど自慢”

ら人民服であった。何とも長閑であった。

天壇公園でお年寄りのパフォーマンス。日本ではボケ防止に良いと言われる「玉回し」、仲間たちと10個ほどの金属球を掌で回す。上手くいくと拍手がもらえる。ここにも沢山の人が集まっていた。日本では高齢者のパフォーマンスは見たことがない。



天壇公園でタマ回し

初めての万里の長城へ、色々な本で見てきたが実際に行くことになって興奮した。途中、コンクリート舗装の道路を走る。ジョイントが悪く振動がひどい。沿道の樹木は黄砂から守るために植えていると聞いた。確かに、黄砂が来ると凄いようだ。



北京から万里の長城へ



赤い腕章の地域の見張り番

北京の旧市街地、近代化していない地域での風景。歩道の上に腕に赤い腕章をした老女がノンビリ椅子に座って周りを見ている。これはリタイアした老人が町内の見張り番をしているとのこと。悪いこと、危ないことを見守って、余生を町内のために尽くすというもの。今の北京にはもうないでしょう。

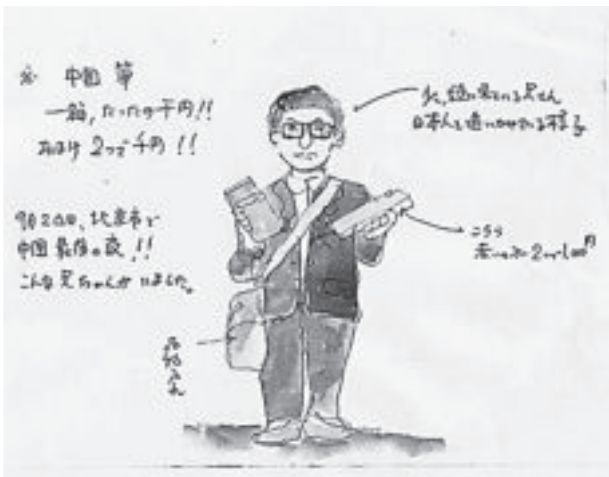
北京の最後の夜、ほろ酔いで店を出ると、兄ちゃんから「筆6本入り、ひと箱千円」、「まけて、二箱で千円！」ときた。思わず日本の友人の顔が浮かんできた。「兄ちゃん、買う」。日本に帰って早速、墨に筆をおろしてみた。何と、すぐ筆が取れてしまった。友人には、「貴重な筆だから、飾っておけ」といって渡した。今も、飾っているかな。

□ さいごに

私の思い出の絵を披露させていただきました。これらは、写真では残せない中国での良き思い出を切り取って絵にしたものです。たまに、この絵を見ながら酒を飲むと自然と微笑んでしまい、ストレス解消になります。瀋陽の人達とは、私を中国読みの「ガオグウ（高宮）」と呼び、親しみを深くし良き交流ができました。

良き思い出を胸に、もう一度、機会を作って瀋陽に行ってみたいと思います。

高宮の中国絵日記ギャラリーへのお付き合いを頂き心から感謝いたします。



北京の夜、偽筆売りの兄ちゃん

高宮 則夫 (たかみや のりお)

技術士(建設/総合技術監理部門)



※成績優秀で合格

APEC エンジニア、IntPE (Jp)

・小樽市 生まれ

・室蘭工業大学 昭和47年卒業

※成績優秀で

・東京都、札幌市採用※就職先変わっています

現在 株式会社北海道技術コンサルタント 執行役員